

辛亥革命へのロシア帝国の干渉——中国東北を中心として——

麻田 雅文

はじめに

一九世紀後半から二〇世紀の東アジアの国際関係には一つのパターンがある。それは日本とロシア、中国の三ヶ国はそのうち二ヶ国が同盟を組んでもう一ヶ国に対抗するという、不幸な三角関係を成していたということである。例えば一八九六年の露清同盟、一九三七年の中ソ不可侵条約、一九五〇年の中ソ友好同盟相互援助条約は日本を仮想敵とするものだった。一方、一九〇六年から一九一七年の四度にわたる日露協約は中国と対立するものであり、一九一八年の日中軍事協定は両国のシベリア出兵を前提に結ばれた。もちろん英米の動向も重要だが、日中露のうち二ヶ国が手を結んでもう一ヶ国と対抗するという図式を当てはめると、二〇世紀東アジアの国際政治史の様々な事象は説明がつくことが多い。

この点についてはすでに別稿で軍事バランスの面から考察したが、本論が扱う辛亥革命時の三ヶ国関係でも同じことが言える。残念ながら前述の論文の執筆当時は、サンクトペテルブルグのロシア国立歴史文書館が閉館中で、ロシア政府内の議論を十分に論じ足りていなかった。本論ではようやく閲覧できたこの文書館の史料に加え、従来

用いてきた史料を再び精査し、改めて百周年を迎える辛亥革命へのロシアの対応、とりわけ中国東北への干渉を考察することで、革命当時の国際環境を検討する。中国史研究者からは辛亥革命の研究はやり尽くした、との声も仄聞するが、革命と国際環境の相関性にはまだ未解明な点が多いのではないか。例えば、辛亥革命に対するロシアの対応を論じた研究では、ハルハ地方におけるモンゴル独立運動に着目したものが世界的に圧倒的な多数を占める。その一方で、中国東北での対応についてはほとんど研究が進んでこなかった。しかし中国東北を横断していた中東鉄道は、シベリア鉄道の短絡線であると同時に、ロシアが中国領に持っていた最大の利権であり、革命時におけるこの鉄道を通じた対応は、ロシア政府内でモンゴル独立運動への対応、カシユガルへの派兵と並んで重要な案件の一つであった。

そのような中でも、ロシアではエヴゲニー・ペロフによるこの時期の露清関係の研究が群を抜いている⁽²⁾。彼の特徴はロシアの文書館史料を博搜した叙述にあるが、そこにはロシアを擁護して日本に罪を被せるための作為が垣間見える。例えば、「一九一一年から一九二二年にかけてペテルブルグと東京の間で、ロシアの北滿占領と日本の南滿占領の秘密交渉があったことは確かだ。しかしそれは成果なく終わった。すでにこの時に日本の軍人たちは北も南も含む全滿洲を単独で、ロシアの参加もなく奪取する考えを抱いていたのである⁽³⁾」と、日本語史料を参照することなく断定している。しかし、革命の動乱の中で日本は特に中国東北に関してロシア帝国の外交政策を左右するパートナーであり、日本の史料を使ってその動向も押さえることがロシアの対応を知る事にもつながる。一方、英語文献ではロシアの文書館史料を用いた辛亥革命の対応をめぐる研究は出ていない。ロシア史研究者として有名なフィ

リップ・モズリーの忘れられた力作「一九一一年から一九二二年のロシア外交」⁽⁴⁾が、『帝國主義時代の国際関係』⁽⁵⁾の独露版双方を参照しつつ、この時期のロシアの対外政策を的確に活写しているのに止まる。問題は日本にかかわる部分も多く、日露双方の史料を参照することで、複眼的に検討する事が可能になるだろう。

最後に、当時のロシア極東の軍制について簡単に解説しておきたい。ロシア軍は皇帝の軍隊であった。平時には陸軍大臣と参謀総長が指揮していたが、全国は一二軍管区と一軍州にわけられて、軍管区司令官は陸相にではなく皇帝に直属していた⁽⁶⁾。ロシア極東では沿アムール軍管区が沿海州、アムール州、カムチャツカ州を管轄し、陸軍の軍人が各州の軍務知事を務め、ハバロフスクにある沿アムール総督府に隷属した。なお同じロシア極東でもザバイカル州は一九〇六年からイルクーツク総督府の下にある。中東鉄道の沿線の指揮系統はこれとは異なり、民政はハルビンの中東鉄道管理局が、軍政は大蔵省の管轄下にある中東鉄道警備隊が担っていた。その正式名称は独立国境警備軍団外アムール管区⁽⁷⁾というが、本論では警備隊で統一する。警備隊は大蔵省が国境での密貿易取り締まりや税関の警備のために設置されていた独立国境警備軍団の一部という位置づけで、指揮権は大蔵大臣にある。警備隊は単に鉄道沿線の警備業務に従事したのとどまらず、義和団戦争や日露戦争に従軍し、第一次大戦ではカフカースや東部戦線に投入されるなど、中国東北に止まらない活発な軍事行動を展開した⁽⁷⁾。このように、辛亥革命時には軍の指揮系統は陸軍省と大蔵省に分かれていたことがロシアの動向を複雑にしている。

なお本論では地域名として中国東北を用いているが、引用文中に限り「滿洲」のカッコは外した。「滿州」と原文に表記されている場合もそのままである。他の地名は、現在の遼寧省瀋陽市は奉天としたように、当時の呼称を

優先した。ただし、当時の正式名称が大清東省鐵路で、日本では東清鐵道と呼ばれていた路線については、清朝崩壊前後の一貫性を考慮して中東鐵道の語を用いる。また当時のロシア側史料で用いられているユリウス暦は二〇世紀では西暦と一三日遅れており、本論では西暦に直して用いた。日本語引用文は原文のカナをひらがなにし、適宜句読点を補っている。

一 革命前における露清関係の危機

日露関係史の研究者は見落としがちだが、日露戦争後にロシアが東アジアで脅威と考えていたのは、依然軍備を拡張し続けていた日本だけではない。原暉之が指摘するように、一九〇七年と一九一〇年の日露協約を経て、その仮想敵には清朝も加わっていた。この間の一九〇八年春にアムール鐵道法案が国家ドゥーマ（衆議院に相当）と国家評議会（貴族院に相当）で審議されて六月に皇帝ニコライ二世の裁可を得ているが、法案の背景には、清朝が中東鐵道の沿線に軍隊を増強し、両国が戦端を開けばハルビンが直ちに占領されてシベリア鐵道は分断される、という懸念があった。当時のロシアは中国東北において、日露戦争前の利権拡大政策を後退させ、ロシア産品を売り込む消費地という役割を担わせるだけの守勢に転じていた。⁽⁸⁾ 清朝による利権回収運動はロシアを刺激していたが、ロシアは日露協商により日本との連携を強化することでこの事態を切り抜けようとする。

一方の清朝は日露戦争後にも依然として日露両国の軍隊が中国東北に居座り続ける事態に危機感を深め、一九〇七年四月に地域の官制改革を断行して東三省を建省すると共に、これを統轄する東三省総督を奉天に置いた。中国東北における光緒新政の展開である。⁽⁹⁾ 利権回収の勢いは辛亥革命前にピークに達し、一九〇九年五月には中東鐵道の収用地（付属地）における主権が清朝にあることを認めた条約が調印されている。清朝を後押ししたのは英米独で、ロシアの特権を認めず中国東北の「門戸開放」を求めていたのである。⁽¹⁰⁾ 勢いに乗る清朝は、同年六月に中国東北における海関設置に関する協議をロシアと開始し、九月までにハルビンや松花江と黒龍江の沿岸に海関を設置した。⁽¹¹⁾

こうして悪化していた露清関係へ火に油を注ぐことになったのは、一八八一年に結ばれたサンクトペテルブルグ条約（イリ条約）の改正交渉である。ロシアと清朝はイリ事件の解決のために結ばれた同条約を一〇年ごとに更新しており、一九一一年はまさにその年にあたった。主権回復の姿勢も強める清朝は、この条約は不平等条約である、とその改正に意気込んで臨む。⁽¹²⁾ しかし、交渉は領事館の設置個所などいくつかの点をめぐって決裂し、ついにロシア政府は武力行使を検討し始めた。交渉中の一九一〇年一二月には、ヴラディミール・スホムリーノフ陸軍大臣が中国東北の占領を大臣会議に進言している。⁽¹³⁾ 翌年一月二十八日には、いざ清朝と開戦となった場合の軍の序列が決まり、日露戦争時のように警備隊は第一ザバイカル軍団か満洲軍の指揮下に入る事が決められた。⁽¹⁴⁾ ついにロシアは同年二月一日に清朝に最後通牒を発する。⁽¹⁵⁾ 開戦の危機が迫っていた。逸る陸軍をいさめたのは外務省である。アナトーリー・ネラトフ外務次官は、日本が同調していないのに単独で「北満洲」をロシアの緩衝地帯とすることに反対する書簡を陸相に送った。⁽¹⁶⁾ 結局、三月二十七日に清朝はロシアの要求の一つである領事館の増設を認めた。しかし条約のそれ以上の改変には応じず、交渉は暗礁に乗り上げて辛亥革命の勃発を迎える。⁽¹⁷⁾

この間にも、清朝との戦争を見据えてロシア側は緊迫感を高めていた。四月六日には現地からの情報に基づいて、中東鉄道の沿線へ清朝軍が攻撃を準備している、とロシア参謀本部が報告した。⁽¹⁸⁾ 報告を受けたヴラディミール・ココフツォフ大蔵大臣は、同日に領事館や交番から警備隊を引き揚げて、原隊に復帰させる許可をピョートル・ストルイビン首相から取りつけた。⁽¹⁹⁾ もともとココフツォフは警備隊の規模が大きすぎて、費用を負担する中東鉄道にとって重荷である、と一九〇九年には大臣会議に縮小を提案していた。しかし条約改正交渉に伴う危機を経て、逆に拡大を目指してゆく。ストルイビンがキエフで暗殺されてから一週間後の一九一一年九月二十五日、本野一郎駐露大使が首相就任祝いに訪れた時のことである。ココフツォフはあと七〇〇名の兵士をポーツマス条約に基づいて中国東北に派兵することを決定した、この点については前首相も承諾済みであった、と本野に伝えている。⁽²⁰⁾ いざ清朝と戦争になれば、中国東北が主戦場となることは明白であった。中東鉄道を守るためにも、ココフツォフは財政を重視した軍縮の意見を変えたのだろう。このように、辛亥革命前の両国はいつ戦争に突入してもおかしくない、緊張をはらんだ状態だった。

政府レベルでの関係が悪化する中で、中国東北では関係改善の模索が続いていた。一九一一年七月に、東三省総督の趙爾巽がドミトリー・ホルヴァート中東鉄道管理局長の遣わした使者に対し、露清同盟を提案したのはその最たるものである。使者に立ったアレクサンドル・スピーツインはウラジオストクの東洋学院で中国語を学び、中東鉄道の発刊していた中国語新聞『遼東報』の編集長を務めていた軍人で、彼の印象では、趙が望んでいるのは米中露の三国同盟であった。⁽²²⁾ アメリカと清朝の提携は、趙の前任者の錫良や、国費留学生として幼くしてアメリカへ

派遣され、コロンビア大学を中退した唐紹儀奉天巡撫の下ですでに進められていた政策である。彼らが英米資本を招き入れて計画した錦愛鉄道と、一九〇九年のアメリカによる日露への満洲中立化提案はその結実であった。趙の提案の新しさはそこにロシアを巻き込もうとするもので、この三ヶ国の同盟が日本を掣肘するものになることは明らかだった。しかし皇帝ニコライ二世は、ココフツォフ蔵相の上奏に「検討する」と書き込むだけで消極的だった。ネラートフ外務次官も北京のイヴァン・コロストヴェツ公使に問い合わせた上で、北京ではそんな話も出ていない、と趙の話に疑義をさしはさんだ。最終的にココフツォフは、奉天に行き、ロシアへの好意は感謝するがこうした問題は外交ルートに乗せるべきだろうと返答せよ、とホルヴァートへ指示している。⁽²³⁾ しぶしぶながらも奉天に赴いたホルヴァートは趙と会談し、ロシアが望むのは平和だけで、同盟成立にはモンゴルにおいてロシア人商人が迫害されず、中東鉄道の沿線に清軍が集結するようなことがないのが条件だ、と高いハードルを設けた。かくしてホルヴァートは交渉に入る事はかわしたものの、九月二日はココフツォフ蔵相へ趙がハルビンに来ることを伝え、まず露清同盟が話題になるだろうから、イエスカノーか返事をはっきりした方が良く、外交官も立ち合わせることを提案している。⁽²⁴⁾ 案の定、趙は一〇月にハルビンを訪れた際にも再び同盟案を持ちだし、錦愛鉄道の共同敷設などを提案した。⁽²⁵⁾ こうしてロシアを口説いている最中に武漢で革命が勃発し、趙は急いで奉天に引き返さざるを得なくなる。

二 革命の勃発と日露による中国東北の分割構想

清朝と長大な国境を接するロシア帝国は、革命の勃発と共に政府間だけでなく地域レベルでの対応も迫られることになった。具体的に焦点となった地域はチベット、新疆、外モンゴル、そして中国東北である。周知のとおり外モンゴルのハルハ地方ではロシアの支援の下に独立が宣言された。新疆へはスホムリーノフ陸相がカシユガルへの出兵を提案したが通らなかつた。では、中東鉄道を通じてこれらより密接な利害関係を有する中国東北で、ロシア帝国はどのように振舞ったのだろうか。まずは政府の対応から見てゆこう。

ロシア政府は革命の勃発に他の列強と同じく驚愕したが、日本が北京への出兵を唆したのには乗らなかつた、とペロフは書く。⁽²⁶⁾この後半は正確ではなく、日露双方がそれぞれ出兵を促していたことは以下で見てゆく。その前にロシア政府内の出兵論議を見てゆこう。ロシア陸軍はすでに極東における動員計画を一九一〇年に策定していた。この計画の主眼は中東鉄道の防衛であり、仮想敵は清朝か日本、もしくはその連合軍である。計画は計三二〇大隊の動員を予定する大規模なもので、カザンを中心にヨーロッパ・ロシアからも兵力が引き抜かれる予定であつた。動員の中核は沿アムール、オムスク、イルクーツク各軍管区の軍団である。有事の際には、まず第一イルクーツク軍団が中東鉄道の沿線に進撃し、黒龍江省の省都であるチチハルからハルビンまでを占領する。日本軍が出動すれば、この作戦が発令されるはずだつた。⁽²⁷⁾ココフツォフ首相兼蔵相とスホムリーノフ陸相は革命直前の一九一一年九月にも清朝との戦争勃発時の段取りについて協議を重ね、革命勃発後の一月には、「北滿洲」に兵を入れる場合

は一九一〇年の義和団戦争の時に倣つて宣戦布告をせず、イルクーツクと沿アムールの軍管区からまず二個師団を動員することを決めた。⁽²⁸⁾革命勃発後はスホムリーノフ陸相がこの動員計画の実行を陰に陽に迫る。例えば一九一二年一月三日の大臣会議で、陸相は「北滿洲」におけるロシアの利権保護のためイルクーツク軍管区の兵を動かすための追加予算を一〇日以内に求めた。⁽²⁹⁾予算を先につけてしまえば、政策はその妥当性のいかんにかかわらず実行に移さざるを得なくなるのは、古今東西よく見られる。陸相は外堀から埋めようとしたのであろう。しかし、外務省は今回も日本の出方を何より重視する。一月四日にネラートフ外務次官は東京、北京、パリ、ロンドンの在外公館に、中国で起きている件に関しては日本と共同歩調をとり、ロシアからは積極的な行動のイニシアティブはとらない、「滿洲」に関することも同様だ、という方針を示す。⁽³⁰⁾また彼は一月一七日に本野大使へ、「南滿洲」でロシア人保護の必要が生じた場合でもロシアからは出兵せず、日本が保護することを期待している、と表明する。⁽³¹⁾サゾーノフ外相も、一月二三日の上奏で次のように日本の動きを重視する方針を明らかにした。

我々と中国の間の政治問題で第一の座を占めるのは滿洲問題です。中国政府は我々が滿洲で占める地位に対して、極めて精力的に闘いを挑んでおります。今この時を利用して、我々はまず滿洲での中国人のこうした敵対行動から身を守ろうとしなければなりません。一方、滿洲での我らの利害は日本と一致しており、日本とは滿洲に関して一九〇七年と一九一〇年に政治協約があるのですから、この問題では日本政府と行動を共にしなければなりませんし、そうすれば我々の案件も簡単になるでしょう。同様に、袁世凱も革命家たちも、滿洲における我らの地位保全を北京公使に示唆していることにも注意すべきです。⁽³²⁾

このように、サゾーノフはまず日本と「滿洲」問題で合意を形成し、新しい中国政府とも外交交渉で懸案を片付ける方針を打ち出した。ニコライ二世はこの報告書に「承認する」と書き込む。かくして、政府の大勢は日本の出方をうかがいながらも出兵見合わせに決した。また同時期に、日本と中国東北の勢力範囲を定める新たな協約の交渉も開始される。この交渉が一九二二年七月の第三次日露協約へと結実することになる。⁽³³⁾こうしたロシア政府の不干涉方針は諸外国にも公にされた。二月二三日にイギリスのジョージ・ブキャナン駐露大使を引見したニコライ二世が、共和国体制は中国の伝統的な帝国秩序に合致するか疑念を表明したものの、「いかなる手段の干渉もいまのところは論外である」⁽³⁴⁾と明言したのは、ロシアの中立宣言と捉えられる。

一方、ハルビンのホルヴァート管理局長とエヴゲーニー・マルトウイノフ警備隊長⁽³⁵⁾は政府と綿密に連絡をとって変化する状況に対応していた。しかし両名は中央政府よりも過激であった。一九二二年一月二八日には、ホルヴァートは中国東北に派兵する場合は、行政の中心地である満洲里、ハイラル、博克図、富拉爾基、ハルビンなどを占領すべきだ、と理事会に進言している。⁽³⁶⁾しかし、上記のように中国東北への動員についてロシアが率先してイニシアティブを取ることはない、とホルヴァートは首都にいる最高経営責任者のアレクサンドル・ヴェンツェリ中東鉄道副理事長から知らされる。⁽³⁷⁾ロシア政府が出兵に及び腰となる中で、ホルヴァートとマルトウイノフは日本軍の中国東北への出動に大きな期待を寄せることになる。一月二三日の川上俊彦⁽³⁸⁾ハルビン総領事から内田康哉⁽³⁹⁾外務大臣への報告によれば、マルトウイノフは「清朝今次の動乱は露国に取り絶好の機会を与ふるものなれば、寧ろ其紛糾の継続を希望す。而して露国は此時期に於て日本と協同して領土上の権利を獲得し、多年此方面に於ける対清外交紛

紜を一掃すべし」⁽³⁸⁾と誘ったという。またホルヴァートも公然と川上に中国東北の分割をけしかけた。「滿洲問題の解決は日露の協同的動作に頼らざるべからず。而して日露両国が滿洲に於て根本的勢力を扶植せんと欲せば、領土権を収むるに如くはなし。蓋し滿洲併合は日露両国間の宿題にして、之れが解決を為すは今日を措て復た他日を期すべからず」⁽³⁹⁾と。中国東北の分割は、日本の動きにかかっていたと言つてよい。

ロシアの出方を左右する日本の動向については駐日武官のヴラディミル・サモイロフ少将が情報収集に当たっていた。彼は革命勃発直後に第一〇、一一、一七師団の派兵が近いという噂を聞くと、部下を第一〇師団の駐屯する姫路まで派遣して様子を探らせている。しかしこれは噂に過ぎなかった。⁽⁴⁰⁾日本陸軍と直接コンタクトを取り始めたのは、一〇月三十一日に石本新六陸軍大臣が東京砲兵工廠へ軍事演習の観戦武官を招き、朝食会を催した時と思われる。この席上、陸相はロシアに駐在経験のある田中義一軍務局長に、中国で進行中の事件について同席しているサモイロフと情報交換をするよう命じる。サモイロフは、日本が今回の事件を非常に重視しており、何人かの將軍は演習にも参加せずに東京に残る事、そして田中が日本は武力干渉する可能性がある、と言及したのをロシア参謀本部に報告した。⁽⁴¹⁾田中はこの日の晩にはサモイロフに手紙も送り、「貴下もご存じのように、中国の情勢は日増しに危険となっております。私が思いますに、もし状況がさらに悪化するならば、我々はロシアと行動を共にするでしょう」⁽⁴²⁾と共同出兵を示唆した。田中は翌日にもサモイロフを訪ね、日本は英露の了解さえとれば、天津もしくは北京と山海関までの鉄道を占領するため派兵する準備があることを告げ、ロシアも北京に派兵する意思があるか尋ねている。サモイロフはこの点につき詳らかではないと答えを避けた。逆にサモイロフが日本は中国東北に派兵する

気があるか問うと、望んではないが鉄道の防衛のためならするだろう、と田中は答えている。サモイロフは一月三日に陸軍省に招かれ、石本陸相から、彼も福島安正參謀次長も演習には行かないことを告げられ、東京に残るよう要請された。また陸相も田中と同じ質問を浴びせ、新疆のイリ地方を占領するのか、とも彼に質問している。それから四日後に再び陸軍省に招かれたサモイロフは、情勢の切迫により日本は天津もしくは北京に關東州から派兵する、と田中から知らされた。⁽⁴³⁾

このように、陸軍では田中がロシアとの窓口となつて出兵計画を練つていた。その背後にいたのは山県有朋元帥を筆頭とする長州閥の面々である。山県や寺内正毅朝鮮総督をはじめとする陸軍首脳部は、前首相の桂太郎を通じて内閣に出兵を働きかけていた。⁽⁴⁴⁾ 桂はロシア側とも接触し、一〇月二日に朝食を共にしたプロネフスキー駐日臨時大使に、清朝の命運については日露が共同歩調をとり、全ての事態に備える必要がある、と言外に干渉を匂わせた。⁽⁴⁵⁾ 長州閥が出兵を焦つたのは、田中の言葉の端々に表れるようにロシアが日本に先んじて派兵して遅れをとるのではないか、という不安があつたと思われる。ロシアが外モンゴルに手を伸ばす中で、寺内は一月八日に「今後如何に我政府は歩を運ばれ候（中略）。南清は当分自然に任すとも滿洲は如何御処分相成候」と、政府の対策はどうなつてゐるのか、と桂へ不安を吐露している。しかし、西園寺公望首相や内田外相は、中国東北への出兵が外国ないし中国から疑惑を招き、また戦費の議會提出が困難であるとして、出兵に消極的だつた。⁽⁴⁷⁾ 詳細は別稿を期しているが、内田外相は立憲君主制の確立を最良の解決方法と信じて本野大使を通じてロシア外務省に働きかけ、その賛同を得ていた。しかし一二月二七日の本野大使への電報では、この計画が關係各国の賛同を得られない上に、清朝

もその決心がつかないため、「帝國政府に於ては此際暫らく事態の發展を觀望すべきことに決定せり」と伝えるよう訓令した。このことは当然ロシアの軍事干渉計画の発令を躊躇させることになつたであろう。さらに、櫻井良樹が明らかにしたように、日本では出兵案が新聞に漏れたことで議會における野党の追及が厳しくなつた上、閣内の意見不一致や列強の反対により、一九二二年二月初旬に中国東北への出兵は中止となつた。⁽⁴⁹⁾ 山県や桂は内閣に不満を募らせ、特に山県は千載一遇の機会を逸したと嘆いた。⁽⁵⁰⁾ かくして中国東北を分割する日露の軍人たちの野望は潰えたが、その間にも革命の動乱は中国東北へ波及していった。

革命派と反革命派の対立は、中国東北では南方より遅れて一一月に先鋭化する。奉天省の革命派は日本に留學経験のある軍人の藍天蔚を「關外革命政府」の首領に担ぎ出し、中国東北にいる新軍の同志たちと連絡を取り、政權奪取の機会をうかがつた。一方、趙総督はハルビンから戻ると、革命派が清朝からの独立を要求するのをいなしつつ、張作霖を奉天に呼び寄せて、武力を背景に革命派の動きを牽制した。さらに趙は清朝政府に藍の罷免を要求し、一一月一四日に藍は大連から上海へと亡命を余儀なくされる。⁽⁵¹⁾ これにより、趙総督は藍が指揮していた新軍の陸軍第二混成協（五一〇九名）を再び手中に収めた。さらに革命派を不利にしたのは、同志の將校が多く在籍した陸軍第三鎮（師団に相当）と第二〇鎮が南方での革命鎮圧のため關外に出動したことである。かくして、指導者と実働部隊を失つた中国東北の革命は挫折する。

一方、南京に赴いた藍は孫文の臨時政府から關外大都督に任じられ、北伐の指揮を執ることになつた。彼は一九二二年一月一六日に關東州の対岸に位置する芝罘（現在の山東省煙台）に上陸すると、日本とロシアに連絡を取り、

革命軍の中国東北への進撃を理解を求めた。日本とのやり取りは他の研究に譲るとして、ここではロシアとの交渉について記しておこう。藍はマルトウイノフ警備隊長に宛てて手紙を送り、自分が東北地方を中華民国に併合するため任命されたことを宣言し、外国政府すなわちロシアが中立を維持するならば、革命政府はこれまで結ばれた条約と借款を遵守することを約束した。逆に中立に違反した場合は敵と見なす、と通告している。⁽⁵²⁾これに対し、ココフツォフ首相兼蔵相はこうした問題は領事館の管轄である、とマルトウイノフの関与を戒めた。⁽⁵³⁾またホルヴァート管理局長には事態を静観するように命じた。⁽⁵⁴⁾二月一日、藍の軍勢は遼東半島に上陸してよいよ内戦が始まる。しかし二月二日には袁世凱に促されて宣統帝が退位したため、南京の臨時政府は藍に停戦を命じた。藍は命令に従って軍隊を引き揚げて辞職する。⁽⁵⁵⁾中国東北は趙総督の手に帰した。かくして、中立を維持したロシアと日本は革命派にも反革命派にも恩を売りと、滿蒙權益に修正が加えられることはなくなった。

おさまりきらない現地ロシア人たちは、なおも干渉の口実を探した。一九二二年二月一六日には、ハルビンにおける中国の行政機関の濱江庁などが中国同盟会の会員によって三日間占拠される騒擾が起こった。⁽⁵⁶⁾ホルヴァート管理局長はこれに軍を出動させるべきだとココフツォフに書き送ったが、相談を受けたサゾーノフ外相は、今は中東鉄道の収用地で行動を取るべき時ではない、とにべもなかった。⁽⁵⁷⁾こうして、ロシアの武力干渉の芽はつまれたかに見えた。

三 革命への干渉—フルンボイル地方の独立支援—

日露の軍人たちが切望した、革命に乗じた中国東北の分割計画は幕引きとなった。しかし、彼らは革命勃発前から盛んとなっていたモンゴルの独立運動を利用して打開の糸口とする計画を着々と進めていた。日本では川島浪速が陸軍と仕掛けた第一次滿蒙独立運動が、東部内モンゴルの反乱を利用しようとしたものであったことが知られている。一方のロシアはすでに後戻りできないところまで来ていた。この間に警備隊が関与を深めていたのも内モンゴルである。例えば、ジリム盟右翼前旗ジャサグ（モンゴルの貴族）のウダイがホルヴァートに、ロシア軍を内モンゴルに入れるか、さもなければできる限りの資金と武器の供与してほしい、と要請していた。サゾーノフ外相はこれに対して、中東鉄道がこのような政治的問題に首を突っ込むのは外務省の権限を犯すもの、とココフツォフに不快感も露わに書き送っている。⁽⁵⁸⁾

そうしたモンゴルの独立運動の中でも、フルンボイル地方の動きに警備隊が直接かかわったことは、ロシアの干渉の中でも突出している。同地方は現在、中華人民共和国の内モンゴル自治区を構成する中露の国境地帯である。モンゴル共和国やロシアでは民族名をとってバルガとも呼ばれる。ここに住むバルガ族はシベリアのブリヤート族に起源をもつモンゴル人である。この地方のハイラルと満洲里という二つの中心都市のうち、満洲里には清朝の行政府である臚濱府と海関が一九〇八年に設置された。フルンボイル地方の開発を熱心に進めたのは、一九〇七年一月から一九一一年一月までフルンボイル副都統の任にあった漢人の宋小濂である。彼は着任するとこの地方をすみずみまで視察すると共に、民政の拡充に努めた。遊牧民の持ち寄った畜産などを売り買いする市を恒常的に開かせ、小学校を開校して満洲語・中国語・モンゴル語を中心に教えた。一方で漢族の農民や兵士による開墾を奨励

して兵士の数を増やし、課税制度も整え、統制を強化した。⁽⁵⁹⁾

しかし、こうした積極政策は裏目に出た。というのも、モンゴルでは一般的に、清朝のこうした「新政」に伴う「内地からの漢人移民の大量投入や牧地によるモンゴル人の定着・農耕民化が、モンゴルの民族性の喪失と漢化の危機と理解されることで、二〇世紀モンゴルの最大の課題としての民族の独立・自治獲得の正当性・必然性が定礎」⁽⁶⁰⁾されたためだ。フルンボイル地方で独立の機運が高まったのは一九一一年夏である。きっかけとなったのはハイラルにあった漢族の学校が再編され、八つの学校で漢語の授業が始められたことだった。フルンボイル王侯たちはこれを漢化政策のはじまりとして警戒し、九月には王侯会議を開いた。この会議で、漢人官吏を追放してこれまで通りモンゴル人の手に行政を任せると、漢族の植民を禁止すること、関税収入をモンゴル人に与えることを求めた。しかしこれらの要求が拒否されると、フルンボイル地方のモンゴル人たちは、ダフル人の勝福らをリーダーにして蜂起を決意する。また一二月一日に現在のモンゴル共和国の首都ウランバートルを中心とするハルハ地方が独立を宣言すると、統一を申し出た。⁽⁶¹⁾一九一二年一月一日、フルンボイル地方のモンゴル人たちはついに軍事行動に訴える。モンゴル人二〇〇名はハイラルのフルン城を包囲し、翌日にはこれを降伏させてフルンボイルの独立を宣言したのだ。二月初旬には西に進軍し、戦闘ののち臚濱府を奪取した。中国の研究者は、こうもスムーズにフルンボイル地方が占拠されたのは警備隊の支援があったからこそだ、と主張している。⁽⁶²⁾事実、中東鉄道はフルンボイルの反乱を公然と支援していた。マルトウイノフ警備隊長はホルヴァートと相談して、フルンボイルのモンゴル人に一〇〇〇丁のベルダン銃を渡していた。そればかりか、彼は臚濱府の攻撃をモンゴル人に指示し、満洲里にはイルクーツク軍管区の参謀長が駆け付け、警備隊の隊員や将校も作戦の指揮を執ったのである。⁽⁶³⁾さらに、井原直澄チチハル領事の本省への報告によれば、臚濱府の攻防の前にチチハルの巡撫がフルンボイルへ清朝の援軍を差し向けようとしたところ、中東鉄道は武器の輸送を認めただけで、兵員は拒否したという。⁽⁶⁴⁾これはマルトウイノフの指示であった。北京のロシア公使館はハルビンの領事館を通じて、清軍の輸送についてはロシア政府の指示を仰げと通告したが、⁽⁶⁵⁾無駄に終わったようだ。一連の支援が勝敗に響いたことは疑いない。

なぜ中東鉄道はモンゴルの独立運動でもフルンボイルには手を貸したのだろうか。最も重要なのは、この国境地帯に中東鉄道が通る上に、露清の係争地域であったことだろう。両国は革命を挟んだ一九一一年六月から一二月まで、フルンボイルをはじめとする西部国境の画定会議をチチハルで開いていた。この会議で焦点となったのは満洲里の帰属問題である。その帰属をめぐるは一六回も会議を重ねられたが、一二月二〇日の「満洲里界約」で、ようやく清朝は満洲里を領土としてロシアに認めさせた経緯があった。⁽⁶⁶⁾フルンボイルの独立運動はこの条約を白紙に戻すことができると考えて、警備隊の軍人たちは特に力を入れたのではないだろうか。もう一つの理由として、中国東北の分割を阻止された現地の人たちのロシア中央に対する反抗心が考えられる。フルンボイル地方のモンゴル人たちがハイラルを落とした翌日から、北京の外交官や首都に在るヴェンツェリ中東鉄道副理事長が、中国への内政干渉はしないのが政府の方針だ、とモンゴル人へ加担しているホルヴァートとマルトウイノフを戒めた。⁽⁶⁷⁾またサゾーノフ外相はハイラルが陥落すると、この件に関して私は責任を取らない、と中東鉄道に警告した。⁽⁶⁸⁾しかし、現地の軍人たちはこれらの警告に対して悪びれた様子がない。それどころかマルトウイノフは、清朝軍が臚濱府か

ら撤退したのは、一名のロシア人将校を犠牲としたものの「我らの栄光を完全に取り戻す」⁽⁶⁹⁾出来事だ、と上司である独立国境警備軍団長に自画自賛している。しかし、サゾーノフ外相は全く評価しない。彼はココフツォフ首相に、戦死したロシア人将校についてマルトウイノフが中国に抗議しろと言っているが、彼は流れ弾に当たったに過ぎない、と拒絶する。その上で、臚濱府の占領は「北満洲」占領の第一歩で、中国東北でのロシアの利害関係からすれば無益なことであり、バルカン半島やイランの情勢が集中を要するときに我々の目をそらさせる、と強く非難している。⁽⁷⁰⁾ サゾーノフから見れば、警備隊の動きは自身の外交方針をゆさぶろうとする謀略でしかなかった。

その後のフルンボイルであるが、ハルハのボグド・ハーン政権は勝福を冊封して「花翎フルンボイル統轄大臣貝子」とした。フルンボイルを新生モンゴル国の一部と認めたのである。⁽⁷¹⁾ しかし、ロシアはボグド・ハーン政権にフルンボイルを委ねることをせず、また中国にも復帰させない政策をとった。そしてフルンボイルはロシアが軍事的に保護することを、一九一三年一月にボグド・ハーン政権の遣露使節に明言した。このことで、ハルハのモンゴル人たちはロシアがフルンボイルを我が物にするのではないかと警戒するようになる。⁽⁷²⁾ この予想は当たらなかったが、一九一五年一月にロシアと中国はフルンボイル条約を結び、中国はこの地方とここで事業を行うロシア人に様々な特権を与えて「特別地域」にしたものの、中国政府の主権下にあることを確認した。⁽⁷³⁾ 第一次世界大戦で苦戦するロシアは、東方の安定のため中国に譲歩したのである。その後も、モンゴル人たちの熱意も虚しく、フルンボイルは外モンゴルへの編入が叶わなかった。その自治も徐々に削られてゆくが、以後、独立心旺盛なこの地域は、中国や「満洲国」にとって厄介な、内モンゴルの火薬庫となる。

おわりに

最後に、露清関係と日露関係から一連の出来事を振り返ろう。辛亥革命前から露清関係は悪化の一途を辿っていた。現地では関係改善のため趙東三省総督が奔走していたが、辛亥革命の勃発を好機と見たロシアは、陸軍が中心となって干渉計画を行動に移そうとする。しかし自らイニシアティブを取ることは陸軍ですら望むところではなかった。彼らは日本の出兵に期待し、注視していたのである。なぜ日本に先手を打たせようとしたのかは推測によるしかないが、ロシアは義和団戦争の折に中国東北を単独で占領したために国際的に孤立した経験があるので、二の舞を演じることを恐れたのではないか。結局、日本は動かなかったためにロシアの大規模な出兵計画も発令されることなく終わる。肩すかしをくわされたマルトウイノフを中心とする現地の強硬派は、手兵の中東鉄道警備隊を動員して沿線におけるモンゴル独立の動きを支援することで糸口をつかもうとした。フルンボイル地方の独立は、この地方の国境画定で清朝ともめたばかりのロシアにとって、問題を有利に書き直すことのできるチャンスでもあった。正規軍がなさないことを警備隊という駐留軍がなしとげたロシアのやり方は、その後の関東軍の姿を彷彿とさせる。しかし、サゾーノフ外相などロシア政府はこの突出を喜ばず、独立工作は中途半端な形で終わった。結果はともあれ、辛亥革命は、潜在していた露清間の緊張と対立を一気に表面化させた点で重要な出来事であった。ちなみに、あまりにも反中姿勢が突出していたマルトウイノフは、ココフツォフやホルヴァートとの対立が原因で一九一三年に解任された。⁽⁷⁴⁾

ところで、最近では日露戦争後から一九一七年のロシア革命までの日露関係の研究が、「例外的な友好」の時代だった、という解釈で盛んである。⁽⁷⁵⁾ それ自体は決して悪いことではない。日露戦争やシベリア出兵、ノモンハン事件、第二次世界大戦、そして冷戦と、いわば百年戦争を戦ってきた二〇世紀の両国関係を考えれば、とりわけこの時代の友好関係を強調したくなる研究者の心理も分らないではない。本論の扱った辛亥革命時にも、日露はたがい情報交換を緊密にしながら共同出兵を練っていたことがわかる。このことほど、日露協約が実質的な軍事同盟だったことを如実に示すものはないだろう。しかし、日露戦争後からロシア革命期までの両国の友好は、満蒙權益を相互に保障しつつ利害を調整することを主眼としていたから、常に中国の犠牲の上に成り立っていたことを忘れてはべきではない。両国がその紐帯を確認した辛亥革命の時期は、「日露同盟」の勢威が頂点を極め、東アジアの勢力圏を自分たちに都合よく線引きしていた時期でもある。中国のみならず、この間に日本の植民地となった朝鮮半島や、第三次日露協約で両国が無断で勢力圏を分割したモンゴルも日露の狭間で翻弄された。フルンボイルの独立運動支援も、ロシアの勢力圏外交の延長にある。フルンボイルは一定の「自治」を手にするが、ボグド・ハーン政権との統一はロシアが許可することはなく、中露の緩衝地帯のまま据え置かれた。現地の独立運動を支援して中露の国境沿いに緩衝地帯を設けようとするロシアの方針は、外モンゴルや新疆でも踏襲された印象を持つが、他地域と比較検討して、ロシア帝国の辛亥革命への対応を地域史からより掘り下げてゆく研究は今後の課題としたい。

註

- (1) Asada Masafumi, "The China-Russia-Japan Military Balance in Manchuria, 1906-1918," *Modern Asian Studies* 44:6 (November 2010), pp. 1283-1311.
- (2) 例を次を参照。Belov E. A. *Россия и Китай в начале XX века. Русско-китайские противоречия в 1911-1915 гг.* М.: ИВ РАН, 1997.
- (3) Он же. *О вводе русских военных отрядов в Китай в 1911-1913 гг. // Проблемы Дальнего Востока.* 1998. No.10. 118.
- (4) Philip E. Moseley, "Russian Policy in 1911-12," *The Journal of Modern History* 12:1 (1940), pp. 63-86.
- (5) *Международные отношения в эпоху империализма. Документы из архивов царского и Временного правительства 1878-1917.* (以下 *МОЗИ* と略記)。本資料の概略については次を参照。三宅正樹「ロシア外務省外交文書集とポクロフスキー——独訳版と邦訳版をめぐる考察——」神奈川大学人文科学研究所『人文学研究所報』五号、一九七一年。
- (6) 和田春樹「日露戦争」『世界歴史大系ロシア史』——一八世紀—一九世紀——山川出版社、一九九四年、三三七頁。
- (7) 警備隊について詳しくは次を参照。拙稿「中東鉄道警備隊と満洲の軍事バランス——一九七—一九〇七年——」北海道大学スラブ研究センター『ロシアの中のアジア／アジアの中のロシア(Ⅲ)』、二〇〇六年。
- (8) 原暉之『シベリア出兵——革命と干渉一九一七—一九二二——』筑摩書房、一九八九年、四〇頁。拙稿「中東鉄道とウラジオストク港の連携と対立——一九〇六—一九一八年」『ロシア史研究』八二号、四二—六〇頁、二〇〇八年、四七頁。
- (9) 一連の過程は次を参照。古市大輔「清末、中国東北における官制改革の推進と東三省建省——盛京將軍趙爾巽による盛京(奉天)官制改革案の位置づけを中心に——」『東アジア近代史学会編』『日露戦争と東アジア世界』ゆまに書房、二〇〇八年。
- (10) 中国社会科学院近代史研究所編『沙俄侵華史』四卷下、第二版、中国社会科学出版社、二〇〇七年、三三—三四頁。なお、中東鉄道収用地の詳しいシステムについては次を参照。拙稿「日露戦争前後における中東鉄道収用地の形成と植民計画——満洲における特殊法域の誕生——」『史学雑誌』一一九編九号、二〇一〇年。
- (11) 孫修福主編『中国近代海関史大事記』中国海関出版社、

- 二〇〇五年、一六二頁。
- (12) 左近幸村「露中国境の自由貿易地帯——その廢止を巡つて——」『ロシア史研究』七七号、二〇〇五年、五六〜五七頁。
- (13) Alex Marshall, *The Russian General Staff and Asia, 1800-1917* (London: Routledge Curzon, 2006), p. 106.
- (14) Российский государственный исторический архив (以下、РГИА) へ略記。在サンクトペテルブルク。Ф. 323 [Правление Общества Китайско-Восточной железной дороги], Оп. 1, Д. 757, Л. 30.
- (15) David J. Dallin, *The Rise of Russia in Asia* (New Haven, Conn.: Yale University Press, 1949), pp. 107-108. 最後通告の日本語版は次に掲載されている。中島宗一編『南満洲鉄道株式会社関係条約集』南満洲鉄道株式会社、一九二五年、一六〇〜一六二頁。
- (16) Mosely, op. cit., p. 82.
- (17) Белое. Россия и Китай в начале XX века. С. 84-85.
- (18) Российский государственный военно-исторический архив (以下、РГВИ) へ略記。在モスクワ。Ф. 1558 [Штаб Приамурского военного округа], Оп. 3, Д. 15, Л. 4206-43.
- (19) РГВИ, Ф. 1558, Оп. 7, Д. 53, Л. 306-4.

- (20) アジア歴史資料センター(以下、JACAR)と表記、Ref. B07090237400 (第四八画像目)、北満洲露国鉄道守備兵関係雑纂(外務省外交史料館)。

- (21) ホルヴァート(一八五九〜一九三七)は東ウクライナのポルタヴァ県の貴族の家に生まれ、一八七八年に陸軍工科大学を卒業、露土戦争に従軍した。平時の隊附将校の勤務に飽き足らず、さらに陸軍工科大学に学んだ。一八八五年にザカスビ鉄道の建設に派遣され、以後数年の中断を除いて長く中央アジアに滞在した。一八九六年から一八九九年までウスリー鉄道東部線の部長。一九〇三年に中東鉄道の初代管理局長としてヘルビンに赴任し、一九一八年四月にそのポストを部下に譲った。その後は日本などの支援を受けてポリシエウイキに対抗する白衛派として臨時最高ロシア政府を樹立し、首班におさまる。一九二〇年に中国軍に北京へ追われてからは、中国における白系ロシア人の指導者として活動した。原『シベリア出兵』、二四七頁。
- Волков Е. В., Егоров Н. Д., Кушцов И. В. Белье генералы Восточного фронта Гражданской войны. Биографический справочник. М.: Русский путь, 2003. С. 218-219.
- (22) РГИА, Ф. 323, Оп. 1, Д. 747, Л. 11-1206.
- (23) Там же. Л. 15-2106.

- (24) Там же. Л. 31-3106.
- (25) Там же. Л. 68, 88.
- (26) Белое. Россия и Китай в начале XX века. С. 41-43.
- (27) Marshall, op. cit. pp. 105-106.
- (28) РГИА, Ф. 323, Оп. 1, Д. 757, Л. 103-10406.
- (29) РГИА, Ф. 1276 [Совет Министров (1905-1917 гг.)], Оп. 3, Д. 727, Л. 1-2.
- (30) Белое. О некоторых аспектах политики царской России. С. 107.
- (31) 「来往電三八八」一五五七〜一五五七二頁(外務省外交史料館)。
- (32) РГИА, Ф. 1276, Оп. 3, Д. 727, Л. 25.
- (33) 中見立夫「『内モンゴル東部』とウラ空間——東モンゴル国際関係史の視点から——」モンゴル研究所編『モンゴル地域文化学叢書Ⅷ——近代内モンゴル東部の変容——』雄山閣、二〇〇七年。
- (34) Dominic Liven, ed., *British Documents on Foreign Affairs: Reports and Papers from the Foreign Office Confidential Print, part 1, series A, Russia, vol. 6, 1910-1914* (Basingstoke: Macmillan, 1983), p. 194.
- (35) マルトゥイノフ(一八六四〜一九三七)はクルシンキ

- 生まれ。貴族出身で父は将校。一八八一年から軍務に就き、一九〇五年に少将となる。翌年から参謀本部大学校教官に就き、同年に『悲しむべき日露戦争の経験より』を出版。日本軍を激賞してロシア軍を徹底的に批判した。一九一〇年から一九二二年まで警備隊長を務め、翌年に退役。一九一八年にポリシエウイキに召集され、一九二八年まで赤軍参謀大学校で教官となった。一九三七年九月に逮捕され、一二月に銃殺された。和田春樹『日露戦争——起源と開戦——』上巻、岩波書店、二〇〇九年、一六一〜一七頁。
- Волков С. В. Генералитет Российской империи. Энциклопедический словарь генералов и адмиралов от Петра I до Николая II. Том II. Д-Я. М.: Центрполиграф, 2009. С. 112.
- (36) РГИА, Ф. 323, Оп. 1, Д. 750, Л. 44-4406.
- (37) Кокин М. Дальневосточная политика царизма накануне и в период революции 1911 года // Исторический сборник. Т. 3. 1934. С. 248.

- (38) 馬場明『日露戦争後の日中関係——共存共栄主義の破綻——』原書房、一九九三年、一五五頁。
- (39) 同右。
- (40) Russia. Voennyi Agent (Japan) Records. Box 2, Folder 2, pp. 8-15. Станфорд大学フーヴァー研究所所蔵。

- (41) *Ibid.*, Folder 3, pp. 39-40.
 (42) *Ibid.*, p. 41.
 (43) *Ibid.*, pp. 43-48, 58.
 (44) 吉村道男『日本とロシア(増補版)』日本経済評論社、一九九一年、三三三頁。
 (45) МОИИ. Сер. II, Т. 18, Ч. 2, М.: Гос. изд-во политической литературы, 1938, С. 297.
 (46) 吉村『日本とロシア』、三四頁。
 (47) 川島真、服部龍二編『東アジア国際政治史』名古屋大学出版会、二〇〇七年、九四〜九五頁。
 (48) 「来往電三九八」一七六六三〜一七六六五頁(外務省外交史料館)。
 (49) 櫻井良樹『辛亥革命と日本政治の変動』岩波書店、二〇〇九年、六七〜七二頁。
 (50) 千葉功『旧外交の形成——日本外交一九〇〇—一九一九——』頸草書房、二〇〇八年、二四一頁。
 (51) 揚雨舒『辛亥革命運動在東北』『中国東北史』第五卷、吉林文史出版社、一九九八年、四六一〜四六五頁。
 (52) РГИА, Ф. 323, Оп. 1, Д. 750, Д. 248.
 (53) Там же. Д. 250.
 (54) МОИИ. Сер. II, Т. 19, Ч. 2, С. 149.

- (55) 西村成雄『中国近代東北地域史研究』法律文化社、一九八四年、一一四頁。
 (56) 哈爾濱市地方志編纂委員會編『哈爾濱市志第二卷——大事記・人口——』黑龍江人民出版社、一九九九年、三三三頁。
 (57) МОИИ. Сер. II, Т. 19, Ч. 2, С. 164.
 (58) РГИА, Ф. 323, Оп. 1, Д. 762, Д. 43-43 об.
 (59) 張徳元『宋小濂在呼倫貝爾』『東北地方史研究』一九八七年一期、五三〜五六頁。
 (60) 岡洋樹『清朝の外藩モンゴル統治における新政の位置』『歴史評論』七二五号、二〇一〇年、一六頁。
 (61) 田中克彦『フモンハン戦争——モンゴルと満洲国——』岩波新書、二〇〇九年、二五〜五〇頁。
 (62) 薛銜天『中東鐵路護路軍与東北边疆政局』社会科学文献出版社、一九九三年、一五九〜一六一頁。
 (63) Государственный архив Российской Федерации (以下「ГАРФ」と略記。在モスクワ)、Ф. Р-6534 [Воложенко Николай Герасимович, Генерал-лейтенант], Оп. 1, Д. 15, Д. 52-53; Белов. Россия и Китай в начале XX века. С. 168-170. この資料はウルフ・デイヴィッド北海道大学教授より提供を受けた。記して感謝する。

- (64) JASAR. Ref. B03050662100 (第二—三画像目か)、『清国革命動乱ノ際蒙古独立宣言並ニ清国政府ニ対シ行政ニ関スル要求一件(外務省外交史料館)』。
 (65) РГИА, Ф. 323, Оп. 1, Д. 762, Д. 57.
 (66) 韓狄『呼倫貝爾邊界事務交渉始末』『内蒙古社会科学』二三卷四期、二〇〇一年、六七〜六八頁。
 (67) ГАРФ, Ф. Р-6534, Оп. 1, Д. 15, Д. 6-8.
 (68) Там же. Д. 10.
 (69) РГИА, Ф. 323, Оп. 1, Д. 762, Д. 103.
 (70) РГИА, Ф. 323, Оп. 1, Д. 762, Д. 157.
 (71) 張啓雄『汎モンゴル統一運動——別角度から見たハルハ独立——』京都大学人文科学研究所『人文学報』八五号、二〇〇一年、四三、四七頁。

- (72) 橘誠『ボグドノハーン政権の第二次遺露使節と帝政ロシア』『史観』一五四号、二〇〇六年、四三三頁。
 (73) 揚陽『日俄等国挑発民族関係、加緊侵略東北』『中国東北史』第五卷、四九〇〜四九二頁。
 (74) David Wolff, *To the Harbin Station: The Liberal Alternative*

- In Russian Manchuria, 1898-1914* (Stanford: Stanford University Press, 1999), p. 171.
 (75) 二〇一〇年の日露関係史の研究成果は枚挙に暇がないので、代表的な研究のみあげる。バルイシエフ・エドワルド『日露同盟の時代、一九一四—一九一七年——「例外的な友好」の真相——』花書院、二〇〇七年。逆に、「ロシアの対日警戒心の持続を強調した論文もある。シュラトフ・ヤロスラブ『日露戦争後のロシアの日本観——外務省と軍部、中央と地方(一九〇五年—一九一六年)——』『ロシア史研究』八六号、二〇一〇年。

〔附記〕本論は二〇一〇年八月二三日に開催された「二〇世紀と日本」研究会での報告に加筆修正を加えたものである。また日露交流センターの「日露青年交流事業若手研究者等フェローシップ(日本人研究者派遣)」と平成二二年度科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による研究成果の一部である。

(日本学術振興会特別研究員PD)